

## 香取遺産

小見川高校建設に伴い、昭和38年に発掘調査が行われた城山1号墳は、関東地方を代表する後期古墳として知られています。このコーナーでも、この古墳や出土品について何度か触れてきましたが、今回はタイプが異なる2点の金銅製の冠を紹介します。

金銅とは、銅に鍍金(金メッキ)を施したり、金箔を押ししたりしたものです。古墳時代に大陸から伝来した手法で、装身具・仏像・建築金具などに用いられています。

写真①は、両端が欠損しているため本来の大きさは不明ですが、現存長28.4cm、最大幅1.8cmの金銅板で、両端に向かって徐々に幅が狭くなっており、全体を円形に曲げたものです。表面は写真②のように、3本の線で帯状に区画し、それぞれの区画には、短い縦線や小さな円文を連続して配しています。鍍金が良好に残っていて、あたかも純金製であるかのようです。

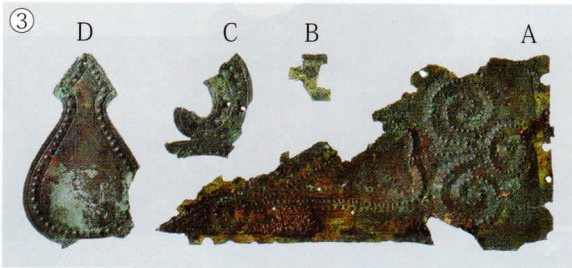
写真③は、数十片に割れてしまった破片の一部です。右の破片(A)は冠の下端で、一部に鍍金が残っています。表面には渦巻文や円文などを打ち出し、右端には金銅板を接合するための小穴があります。中央上の2片(B・C)は方形や唐草文状の透かし彫りがあります。左の破片(D)は菱形と宝珠形を組み合わせた突起状の飾りで、高さが4.8cmあり、縁に沿って刻線と円形の打ち出し文が施されています。全体の形状は不明ですが、本来は、随所に透かし彫りを施して、上部に突起状の飾りを配した冠で、金色に輝く優品であったと考えられます。

いずれも高度な技術を持った職人の作で、まさに王者にふさわしい装身具といえるでしょう。これらの出土品は、市文化財保存館(いぶき館2階)で常設展示しています。



①

◀城山1号墳出土の金銅製冠



③



②

◀①の拡大図